北海道教育大学附属旭川小学校 教育研究大会2023 実践報告

図工　２年２組「まどから　こんにちは」　授業者　盛永　枝里

■授業者より

・図工は，自分との対話がとても大切である。
・鑑賞と表現の往還が自分との対話を深くする。
・本題材では，出会いの場面で参考作品（筒状の立体作品）を見せた。
・表現への思いや願いからカッターナイフを使う必然性を生み，安全なカッターナイフの使い方を指導した。
・これまで同じ題材を扱う際には，カッターナイフの練習をしていた。今回は，児童の学びの文脈に即して，カッターナイフの必要感が生まれた後に，安全なカッターナイフの使い方を指導し，色々な窓の形を試す題材構成とした。
・本時は，試す時間であり，作品づくりの構想の時間でもあった。
・本時でも，すぐに立体作品にしている児童がいた。窓を試してから立体という題材の流れが児童の発達に合っていたのか検討していきたい。
・鑑賞学習追求レベル表を作成することにより，自分との対話を促す声掛けができた。
・自分にとっての意味や価値を見いだすことができていたか考えていきたい。

■指導助言

北海道教育大学旭川校准教授
岩永　啓司　様

【本時の学習から学ぶべきこと】
〇公開授業・研究テーマから見えてきたこと
（授業者への質問）友達のでもよいとしたのは？
→（授業者）できなくてもいいということが伝わってほしい。友達の表現を認めることが，次の活動につながると考える。
◎盛永先生の児童への関わりや，題材を通して自分との対話を基にした鑑賞と表現を相互に繰り返す活動が，児童の自分にとっての意味や価値をつくり出すことにつながっている。
〇図工の探究とは
今井康雄（2021）「モノの経験の教育学　アート制作から人間形成論へ」より
◎言語活動の負の側面も理解しておく必要があることを本書では述べられている。
　言語的な対話は，人に伝えないといけなかったり，共通理解を得ないといけなかったりする。対話を通して，無理やり意味付けをしてしまうこともある。そうなると，非言語的な自分にとっての新たな意味や価値を見いだすことができない可能性がある。児童がじっくりと取り組み，無理に言語化させるのではなく，まだよく分からないままでも活動を展開し，自分にとっての意味や価値を見いだすような学習が本時であった。

■研究協議（主なものを抜粋）

・教科書の題材は「形から」，本題材は「窓から」である。個人的にはどちらからでもいいと思う。形と機能どちらから考えてもよいと押さえていたのか。
→どちらからでもよいと考えていた。思いがあふれている子は立体にすると想定していた。
・大人の発想だとどちらかになる。子供たちが形から考えても，機能からでもよいという指導者の幅が素晴らしい。どのような思考をしているのか子供たちに自覚させても面白いと感じた。
→形と機能のどちらから考えているのかを児童にも自覚させていく指導が必要だと感じた。
・指導者の目指していたところは？導入で例示した教師見本を試した児童がいなかったことが気になった。自由度が高すぎたためか。
→窓の形を工夫する面白さに気付くための導入であったが，窓の中に何を描くかを考えている児童が多かった。前時も同様の様子があった。発達段階を考慮して、活動構成や教師の例示を考えていく必要がある。
・題材名からもわくわくする。子供たちも前のめりで，早く作りたいのがよく伝わった。図工において，自分にとっての価値を自分で気付く難しさがやはりあると感じた。
・図工においての個別最適な学習とは？
→一人一人がじっくり取り組めていることが個別最適な学習となっている状態だと考える。個の学びを充実させるには，友達との関わりが重要となる。困ったら友達に聞けるという安心感が大切である。巧拙ではなく，じっくり取り組んだ先に好きを見付けていってほしい。
・協働的な学習の第一歩は他の人へ関心を向けること。だから鑑賞は効果的だと感じた。
・系統性をどう捉えているか？
→題材が違ってもつながっていくと，今回の実践で強く感じた。４年生も同じような題材構成で行った。４年生は彫刻刀の可能性（機能）を児童が見いだして，自分の作品づくりに自然と流れた。しかし，低学年では，試しと作品づくりが混在する。中学年は，手応えがあったことを作品づくりに生かしていく。低学年の発達を捉え中学年との接続を見据えて指導を考えていく。
・児童理解が素晴らしい。全児童に自分なりの見通しがあり，ずっと自分の中で対話する様子が見られた。全児童がじっくり図工の学習を楽しんでいた。
・先生のことが好きなのが伝わった。児童は常に先生との対話を楽しんでいた。児童同士の対話を生む手立ても大切だが，今日はこれでよかったと思う。
・言葉ではない対話があった。間接的に影響をしていたと思う。
・グループ内での自然な対話があった。グループの子を「見て，まねする」こういう対話があちこちであった。
◎言葉を介さない他者との関わりが自分との対話を促進していた。
◎環境構成，教師の声掛けが自分との対話を生み出した。